

今回は、本町のシンボルである花木、サワフジについて紹介します。サワフジという名前は、沖縄県内で広く呼ばれている名前、フジ(藤)のように下向きに垂れ下がる花を咲かせることが由来です。全国的にはサガリバナと呼ばれていて、また沖縄県内では、地域独自の名前で呼ばれているところもあります。名護市の真喜屋という地域ではモウカバナ(舞香花)と呼ばれているようです。

西原町内では鳩目銭(琉球王国時代に使われていた穴の開いているお金)をぶら下げているように見えることから、ジンガキ、ジンカキ、ジンカキギ(銭掛け木)と呼ぶ地域があります。

なお、花の開花時期は六月から八月頃で、夕方から夜にかけて白色や淡いピンク色などの花が咲きます。そして、明け方には花が散るといった特徴があります。

ところで、本町には樹齢四〇〇年以上と言われているサワフジの木があることは知っていますか。



サワフジの花 (内間御殿のサワフジ)



内間御殿のサワフジ (西原町指定天然記念物)

お問い合わせ

教育部生涯学習課
文化財係 九四四・四九九八



文化財コラム

第4回 町花木 サワフジ

ホクはサワフジの妖精だよ



世界のニシハランチュ大会 第2回 ニシハランチュ、ハワイへ渡る

世界のニシハランチュ大会関連コラム(全4回)



西原村からのハワイへの移民は、1899年(明治32年)12月の沖縄県第1回移民の26人の中にいた字屋屋出身の呉屋次良さん(25歳)が最初とされています。その後移民は増え、1907年のピーク時には年間201人にものぼりました。

その翌年1908年の日米紳士協約の成立でハワイへの移民は制限される(再渡航者、親子・配偶者の呼び寄せのみ許可)こととなりましたが、それでも断続的に移民は続き、数多くのニシハランチュがハワイへと渡っていきました。

移民者の仕事は、キビヤパイナツブルのプランテーションでの労働や自営の農業、商店、白人家庭への奉公などでした。ハワイは、日本よりも労働賃金が高く、働き口にも困ることもありませんでした。さらに日常生活も日本式にできるということで、1906年(明治39年)9月4日付の琉球新報には「郷里から心身とも健全な青年に(ハワイに)来てほしい」という移民を勧める内容の記事が掲載されています。

西原村からハワイへの移民ランキング

- トップ5 (1899~1941)
- 1位 小那覇 287人
 - 2位 我謝 242人
 - 3位 翁長 136人
 - 4位 小波津 75人
 - 5位 内間 74人



当時の西原村には、他府県に本社をもつ移民会社が7社も競合しており、いかに西原村に移民希望者が多かったかということ強く物語っています。

そして、移民元である郷里沖縄もハワイ移民からの送金で経済的に潤いました。また、戦後は、沖縄戦で廃虚と化した郷里にハワイから多くの救済物資などが届き、戦後の復興に大きく貢献しました。

今回はヘルへの移民について紹介します。

さっしゅのメダカ



ふるさとづくり寄付金 (子ども貧困対策・子育て支援に対して)

寄付者: オキコ(株)
(仲田龍男代表取締役社長)
寄付額: 200万円



西原町人材育成会に対して

寄付者: 西原町電設会
(大濱長建会長)
寄付額: 20万円



寄付者: 石川酒造場(株)
(仲松政治代表取締役社長)
寄付額: 10万円



寄付者: (有)沖繩クリーン工業
(前田勝也代表取締役)
寄付額: 20万円



愛の贈りもの
あたたかいお心遣いに、深く感謝申し上げます

2016.10.26Wed ▶ 30Sun
第6回 世界のウチナーンチュ大会

5年ぶりに世界のニシハランチュが集う!

第6回 世界のニシハランチュ大会

世界のウチナーンチュが5年に1度、母県に集う「世界のウチナーンチュ大会」と連携して、国境を超えて絆や友情を育むことを目的に「世界のニシハランチュ大会」を開催します。

日時: 10月28日(金) 18:00~
場所: エリスリーナ西原ヒルズガーデン
会費: 2,000円(海外からの来町者を除く)
申込: 参加希望者は、教育委員会生涯学習課でチケットの購入をしてください。(先着100名)
問合せ: 教育委員会・生涯学習課 生涯学習振興係 TEL:945-5036

大会まであと **88日**
8月1日時点